
葉吾舞（ハーブ）戦隊ジャスミンジャー

森田カズキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーブ
葉吾舞戦隊ジャスミンジャー

【Nコード】

N8367C

【作者名】

森田カズキ

【あらすじ】

ヒーローの友達^{マサヨシ}は愛ちゃんと勇気くんだけじゃない！正義くん^{マサヨシ}だっているんだぞー！町の平和を守るため、わけあり5人が悪人達をちぎっては投げ、ちぎっては・・・ハゲる！？

正義とはタイツを纏うものなり。（前書き）

今までの戦隊ものの固定観念をブチ壊してみました。
しかし作者が固定観念を理解していないので、所詮はこんなもので
す。

正義とはタイツを纏うものなり。

子供の頃は戦隊もののヒーローに憧れていた。弱きものに優しく、悪しきものには厳しく、そんなヒーローに自分もなりたいたいと思っていた・・・。

だが、少し大人になって、戦隊もののヒーローが信じられなくなつた。

人は、何を持って物事を正義とみなすのか、何を持って悪と呼ぶのか、実は正義と悪なんて境界線は存在しないんじゃないかって、そう思うようになってしまった。

ああ、だからもうこんな馬鹿なことはやめさせてくれ。

「キヤーーーーー!!」

街中で、1人の女性の悲鳴が聞こえた。町の中心で、男3人組みが1人の女性を囲んで何か話しかけている。

男3人組は明らかに堅気の間人ではない、俗にいう「ヤクザ」であろう。それがために誰も女性を助けようとはしない。

皆所詮わが身が一番かわいいのだ。だがそれは悪いことではない。誰かを助けるということは自分の身の保障をしなければならぬ、自分の身も守れないような人間が、誰かを助けるなど不可能であり、迷惑な話である。

しかし、本当に正義というものがあつたとするならば、この悲鳴を見逃すはずはない。

正義は確かに存在するのだ。

『皆、行つくぞーV（　　）V イエエーイ』

町のビルに設置された天気や、時間を表している電光掲示板の文字が突然、顔文字入りのふざけた文章にかわった。

その瞬間。

「わっしょい！！」

男3人組と女性1人、ギャラリー数十名はその場に登場した集団に注目せざるをえなかった。

赤、青、ピンク、黄、緑のタイツを着た、どうみても戦隊もののヒーローにしか見えない集団が現れたからだ。

日常生活において、普段着がタイツという人間はそんなにいないだろう。

「なっ・・・何だお前らは！！」

男3人組みは、ありきたりなセリフを吐いて、しまった！と思った。こんなお約束のセリフを吐いてしまった以上、自分達は一話限りのやられ役だと気がついてしまった。

「お前達、そこで何をふざけている！」

男3人組は幼少の頃より素行の悪い人間だった。だから、この手の言葉は何度も聞いていた。耳にタコができるぐらいだろうか。いや、そのタコが彼女にイカを連れてくるくらい聞いてきた。

だが、こんな全身タイツの人間にこのようなセリフを吐かれるとは

思わなかった。この集団に言われて初めてわかった。やはり大人たちが言ったように自分達はふざけていたかもしれない、だが、何といえはいいのだろうか。

とにかく、こんなこんな・ふざけた連中にだけは言われなくなかった。そしてまさか自分がこのセリフを吐く日が来るとは思わなかった。

「お前らこそ、ふざけた格好してんじゃねーか！ー！ふざけてんのか！ー！」

「そうだ、今時銀行強盗でもストッキングはかぶらねーぞ！」
「時代はパンスト」

「「その女性を放せ！ー！」」

「お前ら俺たちと会話する気あんのかア！」

会話がまったくかみ合わない、だが、正義とはこういうものである。己が一番正しく強い、正義とはそうでなくてはならないのだ。そもそもその考え自体が間違っているのだが・・。

「とにかくその女性を放せ。さもねえと・・どうなるか、そんぐらいはわかるだろ？」

全身を緑のタイツに包んだ男が、他の4人を差し置いて、男達の前に出た。

差し置いて、というよりは、他のものがやる気がないだけのような気もしてくるが・・。

そんながんばれる精神にあふれた緑を襲ったのは、男達の辛らつな暴言だった。

「うるせーな緑のクセに目立ってんじゃねーよ」

「緑は黄色と青を足して2で割ったような役割を果たしとけっての」
「加法混色、加法混色」

男達はそういった後、自画自賛してみせた。笑いがとまらない、とまらない、とまらない、そのまま息の根を止めてやろうかと思うほど騒がしい。

ついに緑は、緑のクセに全身を赤くしながら、叫んだ。

「・・・オレだつてなあ、オレだつてこんな変な格好したくねえし、赤でもねえただの緑なのにリーダーぶってベラベラ喋りたくなんかないわ！でもな、見てみる！！」

緑のいうとおり、他の色の隊員を見ると、何ということだろうか。

本来リーダー格であるはずの赤はパソコンに夢中だし、クールな青は本を読んでいる。よくみるとたまに挿絵が入っているので、おそらくライトノベルだろう。

「赤がインドア派なんだよ・・・パソオタなんだよおおお！！！！」

『緑〽誰がパソオタだつて〽（、^、）　ブリブリ。パソコン愛好者っていつてよ　』

電光掲示板の文字が、先ほどの文字から変わった。どうやら、パソオタと言われて怒っているようだ。

しかしそんな時でさえ、赤はパソコンを手放そうとは思わない。

「意味は同じことだろうが！」

赤と緑の喧嘩に耐えられなくなった男達が、正論を言い始めた。

「お前ら街中に私情を持ち込むなよ！何しに来たんだ」

「そうだ！町は皆のものだぞ！！」

「1人はみんなのために、みんなは1人のために」

今となつては男達の言い分の方が正しい。

これが正義の姿なのか・・・と少し嘆きたくなるところで、またしても掲示板の文字が変わった。

『正義の味方だよん¥（。¥）（／。）／ヨイヨイツ 』

「ウオイ！そういうセリフは口に出せ！な？折角いいこと言ってるんだから」

3人組はむしろいい人になっていた。ある意味、正義の力が悪を正した瞬間ではないだろうか。

「赤は・・・諸事情により、このような方法でしか自分のお気持ちを伝えることができません・・・お許しを」

これまで無言でいたピンクが男達にそう告げた。声の感じからして、大の男がピンクを努めるといふ最悪の事態にはなっていないようだ。

「な・・・何でですか」

ピンクの清楚オーラに負けて、男達はいち中坊口調（敬語を使うのが照れくさい年頃の少年がよく使う口調）で話しかけてしまった。

「そないな細かいことは気にしなくてもええやない。だってあんた

らは、知りまへんまんま豚箱に行くんやから」

「ええっ！？俺らそんな酷いことしたっけ！？」

「ナンパは罪っすか！？そうなんすか！？」

「硬派ならいいのかよ・・・硬ければいいのかよ」

黄色というドぎついカラーと、その発言に男達は大いに傷ついた。声の感じからいって、ピンクと同様男ではないようだが・・・。

「そうだ、ナンパは罪だ極刑だ。ということで成敗させてもらう・・・
くらえ『ブリリアント・パンチ』！！」

「ぐばあああああ！！」

輝く拳が、男達3人組を浄化させる。一瞬痛みを感じるが、その後は暖かい光に包まれる。そんなやさしい拳だ。

『緑くブリリアントって何だよ・・・○○。()。) y - 』

「彼は次の授業英語の単語テストがあるから、単語を必殺技に組み込んで無理やりにも覚えようとしてるんだよ」

青がライトノベルを読みながら、答えた。パソコンで会話をする赤も赤だが、こいつもどうかと思う。

「そないやので覚えられたら苦労せんわよ・・・ただでさえ、緑は英語の成績が悲惨やのに・・・」

「でも、効果はあるみたいだよ？単語テストの点数も上がってるみたいだし・・・」

「あ・・・あの、貴方達は、一体・・・？」

やっと男達から解放された女性が、謎の集団に尋ねた。他のギャラ

リーもこのタイツ集団の正体が気になっていたところだった。
が、集団は答えない、しばらくの沈黙があつて、その後こう答えた。

「我々はジャスミンジャー！正義の味方です！！」

ああ、正義というものがあるのなら、どうして正義はこんなに怪しいタイツを装備しなければならないのか。
誰か俺に教えてください。

正義とはタイツを纏うものなり。(後書き)

・おふざけがすぎましたね。
とりあえず、続きものなので、暇があったら読んでやってください。

君は、茉莉花の文字が読めるか！？（前書き）

ジャズミンジャーの正体発覚！？
中途半端なところで終わってます。

君は、茉莉花の文字が読めるか！？

「悪を正す存在となってください」

それが初代の教えだった。だが、俺はいつもそのセリフを聞いて笑いたくなる。何を持って正義というのか、なあ、正義ってのは誰の正義なんだい？悪ってのは誰にとっての開くなんだい？

俺にとっての正義が、アンタの正義とは違ったらそれは悪になるのかよ。

俺はこの緑のタイツに身を通すたびにそう思う。なあ・・・どうなんだい？初代校長・・・「赤月正義」さんよ・・・。

『どうした松葉、背中に描かれた我々が校章・茉莉花が泣いてるぞ（。ー）　ホロリ』

「・・・お前・・・普通に話そうぜ・・・？」

こんな更衣室にまで電光掲示板持込みやがって・・・。と、ジャスミンジャーで緑を努める男、＜松葉博之^{マツバヒロユキ}＞は思った。

『えゝ？でもさあ・・・口に出してしゃべるのって何か・・・疲れない？（、、）』

「お前・・・キーボード打つほうがよっぽど疲れるだろ？」

「松葉くん、許してあげて」

「浅葱・・・」

ジャスミンジャーでは青というポジションの＜浅葱航^{アサギウタル}＞がライトノベルを片手に言った。

体格のいい松葉と比べると線の細い感じがするさわやか系美男子だ。しかし内面は・・・。

「虎次郎は仕方ないんだよ・・事情があつてディスプレイを通してでしか会話ができない・・けど、それでもこうして虎次郎の意思を知ることができるんだ・・だから・・」

「ったく・・何度目だよその話は・・もういいって」

松葉は浅葱の悲しそうな顔を見ると、何故だかとても悪いことをしたような気分になる。だからこの話をするとほとんどの確率で松葉が折れることになる。

『男にはミステリアスな面があつたほうがいいのさ・・（〇ー〇） ムフフ』

「テメーもちつたあ反省しろや!!」

反省しない顔文字男、その名はく赤月虎次郎アカツキコジロウと言つた。

こんなふざけた文章を書いている男だが、外見はまったくふざけていない。メガネをしたインテリ系イケメンである。

これで笑つたりすれば女子にも人気がでるのだろうが、まったくいつていいほど笑わない。というか感情を見せない。

一応親友であるはずの浅葱にも笑顔を見せることはない。何故この二人が行動をともにするのか、松葉は知らない。

「あーあ・・折角の昼休みが台無しだ・・やっぱ戦隊なんて辞めようぜ。やらなくなつて誰も責めやしねえって」

『そ・れ・は絶対だめなの・・（＜―＞・：：・＜―＞）』
「・・・お前・・」

目の前にいる無表情の男がこんな顔文字を打っているなんて信じたくはないが、現実そうなのだから仕方がない。

「松葉くんには悪いけど、僕もそれは無理だと思うよ。生徒会長に『赤月』が君臨している間はね」

生徒会長・・何ということだろう。ジャスミンジャーは現役高校生でおまけに生徒会役員だったのだ。

県立茉莉花高校 ジャスミン 通称ジャス高

最寄りの駅から20分。「最寄りだと？全然近くねーじゃん。詐欺だよこれ」と、生徒の誰もが言う。

うっかり間違えると某大型スーパーの名前になってしまうので注意が必要だ。気をつけよう！

とまあ名前は変わっているが、どの都道府県にもあるであろう普通の高校である。創立50年、そろそろ建物にガタが・・おっと風格が出てきたころだ。

教育目標は「義・愛・変」左から準に「忠義の心」「愛する心」最後の「変」は「変な心」ではなく、「変える心」ということらしい。（生徒の間では「変態な心」「変質な心」など、嫌なイメージで呼ばれている。）早く教育目標を変える（笑）ことをお勧めする。言いたいことはわかるのだが・・。

校章は先ほども書いたように、もちろん茉莉花の花である。制服は、世界征服できそうな黒い制服だ。そんなところから、もうひとつのあだ名は「黒高」である。

生徒会長は毎年『赤月』の名を持つものが受け継ぐ。私立でもないのに一体何なのだろうかこの君臨ぶりは。

松葉は昼にあった事件のせいで英語の授業で行われる単語テストを見事不合格となり、補修を受けた後で生徒会室へと向かった。できれば早めに生徒会室に入りたかった松葉にとって補修は地獄である。

生徒会室のドアに設置された電光掲示板には、すでに文字が浮かびあがっている。つまり、生徒会長赤月はこのドアの向こうにいるのだ。

ああ、何ということだ。松葉は信じる神もいなくせに神を呪った。

電光掲示板にはこう書かれていた。

『体育委員長・松葉。お前がドアの前にいることはみんな承知してるぞ さつさと入れよ（・―・）〃（〇――）〇……』
「オメーが先に来てたらこのドアの前で1〜3番まで校歌を歌った後さらにオメー作のマボロシの4番まで歌わねーと入れねえだろが――」

松葉の怒りは爆発した。他の役員もそうならば文句は言わないだろうが、何故か松葉だけこんなルールが出来上がっているのだ。

『この学校を愛しているなら余裕じゃない？（〇）／フレイヤ（〇）／フレイヤ（〇）』

「学校と4番の因果関係はねえ！！何故なら4番はオメー作だから――」

松葉はドアに怒鳴り続けている。ドアにだ。ドアに……。端から見たら、かなり怪しい。

『そんなワガママ言ってていいの？ガッツだぜ！　ゝ（　・（　・
　　・（　ゝ』
「いちいち催促してんじゃねえよ・・・あゝっ・・・くそっ・・・ジャ
スミン・・・それは愛！お茶の中で奏でるハーモニイー！！不思議
な香りに包まれてゝうーん！ジャスミン！！校歌は頭痛に神経痛
・・・ジャスミン・・・それは恋・・・」

茉莉花はジャスミンって読むんだよ！勉強になつたね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8367c/>

葉吾舞（ハーブ）戦隊ジャスマンジャー

2010年10月28日07時19分発行